

【一般口演4】 第15席

—新出の吉田流質料—『是好卷』に関する一考察

大阪 長野 仁

演者は、第一回日本鍼灸臨床文献学会より、日本鍼灸流派の一つである吉田流に着目し、その流儀書を通じて、近世日本鍼灸の実相に迫ろうとしてきた。

吉田流を検討の対象とした理由は、以下である。

- ①流儀書の編集意図と伝本系統が比較的明瞭であること（伝授形式が確立していたことの反映であろう）。
 - ・臨床系（冊子本）：『刺鍼家鑑集』『脈論』『蟲書』
 - ・基礎系（卷子本）：『家秘鍼穴』『経絡考義』〔大明鍼家琢周伝〕
- ②五蔵・腹部・諸蟲を重視するなど、中世的身体観を色濃く残す一方、鍼術を主とする脈診や病証に従った近世的治療法を強調している（仏教医学的な基層に新渡の鍼術・新医学の疾病概念が重なって流儀が成立したことを物語るだろう）。
- ③穴名を創作するなど、流派の独自性が際立っている（独特の記号文字を作成して薬物を示す同時代の試みとも呼応するだろう）。
- ④類似の流儀を保存する匹地流との対比によって、吉田流の特徴をより把握できる可能性がある。

このたび発見した『是好卷』（全15葉）は、京都大学附属図書館富士川文庫（セ・118）に所蔵され、書名からは吉田流の書とは判別できない。だが、本書の巻末に「吉田流伝書」、とあり、安永五年[1776]と天保五年[1834]の識語がある。基本的には『家秘鍼穴』の異本で、穴図（やや簡略）と百十四穴を列記したものであるが、他の伝書にはない五蔵図や、各穴に主治症が示されているのが特徴である。

そこで、本書の各穴の主治症と『刺鍼家鑑集』の各病門の主治穴とを比較し、共通点と相違点を明確にしてみたい。